

## WEBを利用した模擬査読の課題と可能性

木下衆<sup>1</sup>・樫田美雄<sup>2</sup>

### 1. はじめに

2010年当時、本論文の第一筆者（2節以下をおもに執筆）である木下は、保健医療社会学会会員であり、第二筆者（本節と資料1, 2をおもに執筆）である樫田は、同学会の理事・研究活動担当であった。樫田は、関西地区の定例研究会の担当であったので、もう一人の関西地区担当の研究活動理事であった伊藤美樹子氏とともに、相談の上、通年で若手支援企画を組むこととし、その第一回目企画として、2010年9月18日に「模擬論文査読会」を開催した（論文末尾の資料1, 2を参照）。この「模擬論文査読会」に、模擬査読用原稿を提供したのが、第一筆者の木下であった。

この2010年の模擬論文査読会本体は、以下のスケジュールで実施された。①まず、模擬論文の提供を受け（イベント50日前）、②ついで、主催者が査読者甲・乙を選任し、③ほぼ1ヶ月の査読期間で、その甲・乙に査読をしてもらい、④集まった査読コメントを、元の模擬査読会用論文とともにPDFファイル化したうえで、パスワード付きで、WEBサイトに掲載し（約10日前）、⑤あらかじめ申し込みを受けていた模擬論文査読会参加メンバーにパスワードを配信し、⑥さらに、模擬論文提供者にも、甲乙からの査読コメントを配信し、⑦模擬論文提供者に「甲・乙両査読者へのリプライ」の執筆を依頼し、⑧イベント当日は、関連諸資料を印刷配布のうえ、議論を行った。

この9月18日のイベントには、約50名の聴衆が詰めかけ、結果は、たいへん満足のいくものであった。主要な感想は、「勉強になった」とい

---

<sup>1</sup> 所属は、京都大学大学院・日本学術振興会。電子メールアドレスは、[mohitori@gmail.com](mailto:mohitori@gmail.com)。

<sup>2</sup> 所属は、徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部、総合科学部併任。電子メールアドレスは、[kashida.yoshio@nifty.ne.jp](mailto:kashida.yoshio@nifty.ne.jp)。WEBサイトは、<http://kashida-yoshio.com/>。

うものだったがそれと同じぐらい多くの聴衆から、また同様のイベントを開いてほしいという要望が出されることとなった。

この要望に対し、榎田は、イベントの繰り返しの開催には、費用その他の面から進むことが難しいと判断し、むしろ、無償提供されるバーチャルな教材として、このイベントの関連資料を生かしていく方向を模索すべきだ、と考えた。この新しい方向性をもって、模擬査読論文の著者である本稿の第一著者などに打診をしたところ、関係のあるどなたからも許諾・協力を頂けることとなった。

そのため、「模擬査読会」の第2弾企画として、榎田の本務校の大学院の授業において再度の模擬査読会を2回連続で実施し（一回目は、班活動として査読コメントを書いてもらい、2回目は個人活動として査読コメントを書いてもらった）、その活動で集めた8本の査読コメント文をも素材に加えるかたちで、WEBを利用した「バーチャル模擬査読」が可能となるように、資料を整えていった。それらの諸資料が注5にあるように、現在閲覧可能になっており、模擬論文査読会類似行為を行うことが可能となっている。すなわち、世界のどこからでも利用できる形で、投稿や査読の実務に通じたい個人や、学生・院生の研究能力を向上させたい教員の利用に向けてオープンにされているのである（もちろんWEB上での利用は無料であるし、事前許諾の申し出の必要もない）。

本論文は、上記のような経緯でWEB上に掲載されることになった「模擬・論文査読会」用の資料が、いったいどのように使われているのか、をフォローし、そこにある未解決の問題を明らかにしつつ、解決策も模索しようとするものである。この論文が広く読まれ、問題が解決するとともに、当初の公開目的である、WEB上での模擬査読論文およびその関連文書の利用が進むことを期待している。

## 2. 事前に予想された問題

2010年9月18日開催の「模擬査読会」は、あくまで学会の定例研究会として位置づけられる一方で、そこでは（じっさいに）「論文としての

質を持つ」原稿を検討することが求められた<sup>3</sup>。そうでなければ、「査読プロセス」を真剣に体験することにならないからだ。そこで木下は、自身が実際に日本保健医療社会学会の機関誌（『保健医療社会学論集』）に投稿を予定していた原稿の草稿を用いることを提案した。「模擬査読」の原稿論文の締め切りは2010年8月初めである一方、学会誌の原稿締め切りは9月末であり、「論文としての質を持つ」原稿を用意するためのスケジュールとしてちょうどよい感じだった。

ただし、このように実際の投稿予定の原稿を「模擬査読」で使用するためには、いくつか確認すべき点があった。当時の研究活動委員長及び当時の学会誌編集長らが、木下を交えて確認した内容は、以下の二点にまとめられる。第一に、「模擬査読」にあたる学会員と実際の査読にあたる学会員は、その選任プロセスからして、全く独立であり、交流・引き継ぎ関係がない人選となる予定であるという点。第二に、この、学会主催の模擬査読会イベントに参加したのちに、機関誌に投稿しても「二重投稿」には当たらないという点である。

第一の、「模擬査読」と査読にあたる学会員がそれぞれ別であるという点について。両者が重なっていた場合、特に実際の査読の際に何らかの影響がでる恐れがあった。この点に関しては、当時の研究活動委員長及び当時の学会誌編集長が、この二つは全く別の学会員が担当することを約束してくれていた<sup>4</sup>。また、「模擬査読」で用いられた資料はWEB上に掲載されるが、学会誌の投稿から投稿者へのコメント返却の査読サイクルに影響を与えないように、パスワード抜きでは閲覧できないような

---

<sup>3</sup> 樫田から木下への私信より抜粋。

<sup>4</sup> たんに査読者選任プロセスが独立なだけでは、偶然に同一人物が査読者に選ばれてしまうリスクからは免れることが出来ない。しかし今回は、9月18日の模擬査読会イベントで査読者を勤めたものは、機関誌の査読者選任を受けた場合には辞退を申し出ること、および、その辞退の申し出を、編集委員会側でも尊重することを事前に取り決めていた。このようなプロセスが事前に確認されていたので、安心して9月18日イベントを開催することができた面がある。

設定とされていた<sup>5</sup>。

第二に、「二重投稿」問題について。そもそも、「模擬査読」はあくまで「模擬」に過ぎない。そのため、模擬投稿原稿は「論文としての質を持つ」研究会資料という扱いになり、二重投稿にはあたらないということが事前に確認された。そのため、その後木下が学会誌にこの原稿を投稿し、査読の後に掲載されたとしても、それが「初出原稿」としての要件も満たしていることが確認された<sup>6</sup>。

以上二点を確認して臨んだことで、「模擬査読」自体は極めてスムーズに進行した。しかし「模擬査読」終了後、この模擬投稿論文が WEB 上で公開されていることに関連して、いくつかの問題点が浮上した。

### 3. 「模擬査読」後に発生した問題

当初は問題として認識されていなかったが、「模擬査読」後に発生した問題として、以下の二つがあげられる。第一に、「模擬査読」の内容を知らないままに、模擬投稿原稿にアクセスする人がいるという問題。第二に、模擬投稿原稿に記した内容がその後どう展開したか、読者と共有できないという問題だ。

#### 3.1 「模擬査読」を知らない人による、模擬投稿原稿へのアクセス

模擬投稿原稿はイベントの翌年になって、樫田のホームページ上でパスワードのない形で公開されるようになった。この模擬投稿原稿を利用

---

<sup>5</sup> <http://kashida-yoshio.com/20100918-hoken/kansai-teirei.html>

この樫田のホームページで、「模擬査読」関連文書は現在もアクセス可能である。

<sup>6</sup> なお、模擬投稿原稿と学会誌に実際に投稿された原稿は、タイトルなどいくつかの箇所が異なっている。これは模擬査読の際に受けたコメントを反映させた結果であったが、当時の研究活動委員及び学会誌編集長とは、「模擬査読コメントを、実際の投稿原稿に反映させることは問題がない」旨も確認していた。模擬査読への題材提供は、学会大会での口頭発表と同様の学会活動だと捉えられる。とすれば当然、模擬査読論文へのコメントも、学会大会での口頭発表へのコメントと同様の位置づけだと判断できるからだ。

した大学院での講義が計画されており、またこの「模擬査読」全体に言及した論文も刊行される予定であったため<sup>7</sup>、公開をした方が良くと判断されたからだ。

しかしあるとき木下は、知人同士が某大手 SNS(Social Networking Service)上で、この模擬投稿原稿について議論を交わしている場面に遭遇した。彼らの疑問をまとめれば、「この原稿は一体何のために書かれたのか？」となるだろう。—ホームページの冒頭には、「模擬査読論文とそのコメントとリプライ」とある。ではこれは、大学院生が査読を意識して書いたレポート課題なのか？ それとも、学生に論文の書き方を教えるための教材なのか？ —彼らは、この模擬投稿原稿の位置づけを巡って、しばらく推論を重ねていた。

この場面には、「模擬査読」という背景が伝わらずに原稿が人びとの目に触れてしまうことの危険性が指摘できるだろう。実は榎田もその問題を予見しており、「模擬査読」関連の文書をまとめたホームページの冒頭に、この「模擬査読」全体の位置づけを説明した文書を掲載していた。しかも、「本頁の利用にあたってはこちらのワードファイルを先にご一読いただき、注意にしたがってご利用ください」との注意書きを加え、まずはその説明文を閲覧するよう、促していた。しかし木下の知人は、その注意書きを見落としていた。結局このときは、木下がやり取りに割り込み、「実は学会の定例研究会で『模擬査読』というイベントがあって」と、論文の位置づけを説明することとなった。しかし他にも、同様に冒頭の注意書きを見落とし、「模擬査読」について理解しないまま原稿を手にとった人がいないとも限らない<sup>8</sup>。

この様に「模擬査読」という背景が共有できるかどうかで決定的に異なるのは、読者が模擬投稿原稿の内容をどう扱うかという点だ。模擬投

---

<sup>7</sup> 『保健医療社会学論集』第23巻1号掲載の特集論文、榎田(2012a)、木下(2012b)など。

<sup>8</sup> 例えば、ホームページ冒頭に注意書きを書きおいても、検索などで直接、模擬投稿原稿にアクセスしてしまう可能性はある。

稿原稿は、本文からの引用を想定していない<sup>9</sup>。模擬投稿原稿で提示されている分析はあくまで未完成のものであり、その後筆者が取り下げた内容も含まれているからだ。しかし仮にこれが「模擬査読」に提出された論文ではなく、WEB上に公開された一つの完成された論文だと誤解されたとき、その本文は引用される可能性がある。檉田が注意書きと合わせて「模擬査読」関連の文書を公開したのは、そうした誤解を避けるためであったが、それでも誤解は生じていた。

### 3.2 模擬投稿原稿に記した内容のその後の展開が、読者と共有されていない

木下は模擬投稿原稿に記した内容を、その後、『保健医療社会学論集』に実際に投稿した。その内容は三度の査読を経て、大幅に修正されたうえで、同論集第22巻2号に木下(2012a)として掲載された。木下はあるとき、この木下(2012a)について、知人の研究者と議論していた。その際この論文と、元になった模擬投稿原稿の内容を比較して説明する場面があった。すると彼は、「あ、あの模擬投稿原稿があんな風になったのですか」と、感想をもらした。

ここで重要なのは、木下の知人が模擬投稿原稿及び木下(2012a)のどちらにも目を通していたという点だ。彼は木下の研究内容に関心を寄せていた。にもかかわらず彼は、両者を結び付けてはいなかった。つまり、模擬投稿原稿とそれを元に後に執筆した原稿、その両方にアクセス可能であったとしても、読者はそれらを結び付けて理解するとは限らない。

こうしたとき特に問題となるのは、模擬投稿原稿で提示された分析(の一部)が、その後著者によって取り下げられていた場合だ。木下の知人は、先に触れた点すなわち、「模擬査読」という背景も模擬投稿原稿の位置づけも十分に理解していた。その上で彼は、模擬投稿原稿で木下が示していた分析の内容に関心を示し、「それが論文としていつ引用可能にな

---

<sup>9</sup> 「未定稿ですので、社会学の学術論文としての引用や批評はお控え下さい」という注意書きが、冒頭の注意画面には書かれている。

るのか」と尋ねていた。しかしその箇所こそは、木下が査読コメントなどを受けて「分析に問題がある」と木下（2012a）では取り下げた箇所であった。木下は査読コメントの内容なども含め、「なぜその分析を取り下げたか」について説明した。相手の研究者はその経緯について納得したものの、「現に WEB 上に掲載されている内容を（木下が論文化するつもりがない以上）今後も引用できないことは勿体ない」というコメントを残した。

模擬投稿原稿をもとに学会誌への投稿原稿を執筆する場合、査読プロセスを経て内容が大幅に修正されることはありうる。その過程で、データを差し替えたり、分析を修正したりすることも大いにありうる。しかし模擬投稿原稿がそのままの状態アクセス可能になっているということは、読者が「筆者が後に査読を経て取り下げた分析」にアクセス可能になっているということでもある。先の例では、木下は知人にたまたま、その経緯を口頭で伝えることができた。しかし今後の多くの読者にとっては、その分析がなぜ取り下げられたのか、そしてそもそも、その分析が取り下げられたこと自体わからないままに、模擬投稿原稿を読むことになる。

### 3.3 内容の「不十分な」原稿を公開するリスク

「模擬査読」後に発生した以上二点の問題は、どちらも、筆者自身が不十分だと認識している、その後取り下げた内容までをも含む原稿が WEB 上に残ってしまうリスクだと、換言できる。模擬投稿論文が「模擬査読」を成立させる元資料であることを考えると、これを WEB 上で公開し、広くアクセス可能にしておくことは妥当だ。しかし模擬投稿論文という、査読を経していない一方で「論文としての質を持つ」原稿が WEB 上に掲載されていることは、基本的に異例のことだ。さらにその内容（分析の妥当性など）は、最初から不十分であることが想定されている（だからこそ査読プロセスの練習すなわち「模擬査読」の対象になる）。もちろん、研究者が研究を重ねるにつれ、かつて自身が発表した論文の内容の不十分さに気づき、その一部を修正ないし撤回することはご

く当たり前に起きることだ。しかし模擬投稿論文の場合、著者自身も最初から内容が不十分だと分かっているものを公開しているという特徴がある<sup>10</sup>。

筆者自身が後に取り下げることになるような不十分な内容を含む原稿が、査読コメントを寄せる余地があるという、いわばその内容の「不十分さ」ゆえに、公開され続けているということは、このように複数の問題を派生させる源になっているのである。

#### 4. WEB 利用の特性を生かす

もっとも以上の問題点は、技術的にごく簡単に解決できる点ばかりであることを、最後に強調しておきたい。例えば、模擬投稿原稿のファイルに利用上の注意をまとめた文書を挿入すれば、「模擬査読」について知らず、また冒頭の注意書きを見逃した人にも注意喚起が可能だ。あるいは、その新たに加えるページに、この原稿をもとに木下（2012a）が執筆されたことを加筆すれば、読者とその後の展開を共有することも可能だ。要するに、WEB 上に掲載している関係資料に、必要だと分かった情報を順次加え、ファイルを差し替えていけばよいのだ<sup>11</sup>。

こうして、いったん掲載した資料を、必要に応じて即座に更新できる

---

<sup>10</sup> 同様のことは、「模擬査読」に関連する文書についても生じる。例えば、「査読コメントへのリプライ」が修正されたケースがある。査読者乙へのリプライには、もともとは、乙に対して「このような修正ならどうか？」と木下が提案する個所が1か所あった。これは、「模擬査読」当日の木下の発表時に、乙が来場するからこそその個所であった。しかし通常のリプライで、そのような投稿者からの「提案」が含まれることは考えられない。木下はWEB サイトへの掲載後そのことに気づき、「模擬査読」独特の状況があったが故の「提案」であったと、コメントリプライに注を書き加える形で、ファイルを改訂した。つまり現在WEB 上で閲覧できている「模擬査読者乙のコメントへのリプライ」には、定例会当日にはなかった注が書き加えられているのである。

<sup>11</sup> ただしファイルを更新しても、更新前のファイルを入手した全ての人にその情報を伝えることはできない。その限界は意識する必要があるだろう。

ことは、WEB の特性を生かした対応だといえるだろう。これがもし紙媒体をベースにした資料共有であれば、このようにスムーズな対応はできないはずだ。

WEB を利用した「模擬査読」という試みは始まったばかりであり、それ故にフォーマットもない。今後も、予想しなかった問題が生じる可能性はある。もちろん、ここで挙げた事例研究を参考に、問題が生じる点を事前に打ち合せ、十分な手当てをしておくことは必要なことだ。しかし同時に、全ての問題を事前に予測することはできないことも確かなことだ。ならばむしろ、WEB 利用の特性を生かし、必要だとわかった情報を随時加えて、その改訂されたファイルを迅速に公開していくことが、今後取りうる最良の方針ではないだろうか。

資料を公開した後に必要だとわかった情報があれば、それを加えたファイルに即座に更新していくこと。—このごく単純な方針こそ、今後の「模擬査読」を支えるシンプルだが強力な方針だと考えられよう。

## 参考文献

- 樫田美雄、2012a、「論文投稿学・序論——投稿誌の選定から査読対応までの支援学の仕組み」『保健医療社会学論集』23(1): 3-15 (2013 年秋以降, CiNii のサイト=<http://ci.nii.ac.jp/>=にて PDF ファイルを公開の予定)
- 樫田美雄、2012b、「『社会学評論』の現況分析——専門委員アンケート調査およびインタビュー調査等からの自己点検 (資料付き)」『社会学評論』編集委員会『編集委員会報告書『社会学評論』の現状と課題——若手支援のために・自己点検のために——』日本社会学会、頁未定 (2013 年に <http://www.gakkai.ne.jp/jss/>内にて、PDF ファイルが公開される予定)
- 樫田美雄、2013、「論文査読の現実——方法的吟味・現状把握・助言的にいえること——」『学的探求の道案内』(仮題) 東信堂:(印刷中)
- 木下衆、2012a、「家族会における『認知症』の概念分析——介護家族による「認知症」の構築とトラブル修復」『保健医療社会学論集』22(2):

55-65

——、2012b、「査読される側の倫理——ある模擬査読のケーススタディ」『保健医療社会学論集』23(1): 28-37

＝資料 1：2010 年 9 月 18 日イベントのチラシ＝

日本保健医療社会学会・2010 秋の関西定例研究会

「論文投稿支援のために」

～論文審査の実際と査読コメントの読み方：論文投稿から掲載まで～

趣旨：今回の研究会は、「若手研究者支援」として企画されました。大学  
院における徒弟制的教育体制が崩れてきているにもかかわらず、代  
わりの教育スタイルが確立しているわけではありません。この状況  
下で、会員数が増えているにも関わらず、投稿数があまり増えない  
機関誌、という問題が生じてきています。もっと投稿してもらうた  
めに、もっと再投稿してもらうために、本研究会は企画されました。

前半では、学会誌の編集業務に習熟している理事から、「論文審査の  
実際」に関して、説明があります。投稿すべき雑誌の選び方・コメ  
ントの読み方・執筆規程に従う意味・評価割れがどのように処理さ  
れるか等々の興味深い話が聞けることでしょう。

後半では、「査読コメントの読み方実習」と銘打って、演習形式で投  
稿が B 判定や C 判定で戻ってきた際の振る舞い方を研究します。厳  
しいコメントにどう対応するか？他誌に逃げるか、つづけて投稿す  
るか。論文もコメントも資料配付いたしますので、いっしょに考え  
ましょう。

※ただし、査読者の匿名性維持には配慮します。

1. 日 時・・・2010年9月18日（土曜日）  
午後1：30～5：25
2. 場 所・・・龍谷大学大阪梅田キャンパス研修室  
（大阪市北区梅田 2-2-2 ヒルトンプラザウエスト・  
オフィスタワー14階、大阪駅徒歩4分）
3. 会 費・・・無 料

※資料配付を受けるためには、

下記 mail address への事前申込（9/12（日）正午締切）が必要。

申込 E-MAIL : hoken20100918@yahoo.co.jp

#### スケジュール

- 13：00 開場（電子メール申し込み者への資料配付＝第2部の論文・  
査読文＝HP上でも配信予定）
- 13：30 開会挨拶（司会：伊藤美樹子（大阪大学）による趣旨説明、  
演者の紹介）  
＝第1部：論文審査の実際＝
- 13：40 第一講演：論文投稿のすすめ－投稿誌の選定から査読対応  
まで  
榎田美雄（徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイ  
エンス研究部）
- 14：20 第二講演：歴史と体制を理解して書く——社会学の学会研究  
体制の歴史と現在  
天田城介（立命館大学・大学院先端総合学術研究科）
- 15：00 指定質問者（2名程度）による質問・質疑応答。
- 15：10 （休憩）  
＝第2部：査読コメントの読み方実習＝
- 15：20 題材提供者（その1：木下衆・京都大学）による発題（論  
文＋コメント＋リプライ）
- 15：50 質疑

- 16:10 題材提供者（その2：有吉玲子・立命館大学大学院）による発題（「私の査読雑誌投稿物語」）
- 16:40 質疑
- 17:00 まとめ
- 17:05 参加者自己紹介（含コメント、学会・研究例会への要望事項等々）
- 17:25 事務連絡（宴会案内等）
- 18:00 懇親会

**＝資料2：2010年9月18日イベント参加者向け注意＝**

参加予定者各位

2010年9月8日

『保健医療社会学論考』模擬論文及び、査読結果報告論文の読み方について

担当理事 榎田美雄

2010年9月18日の保健医療社会学会関西定例研究会の第2部では、架空の雑誌への投稿論文を元にした模擬査読とそれへのリプライの検討を通して、論文投稿の実際をバーチャルに体験して頂きます。ここでは、関連配布物を確認し、その活用の仕方に関して若干の注意を致しますので、どうぞよろしくお願ひします。

**【1】事前配布物**

3種の事前配布物があります。

- ① 模擬査読論文（木下論文）
- ② 査読者甲の模擬査読文
- ③ 査読者乙の模擬査読文

※木下論文は未定稿ですので、社会学の学術論文としての引用や批評はお控えください。

社会学教育の文脈で、9月18日の会議に触れる場合には、言及して頂いても構いませんが、その際にもなるべく著作権者（木下衆氏）の許諾を請求するようにして下さい。

【2】当日配布物

1種の当日配布物があります。

- ④ リプライ案（模擬査読に対して、再投稿する論文にそえる文案のプランレベルのもの）

【3】9月18日の予定

当日は、以下の予定で第2部＝前半＝を進めます。

- 1) 論文本体は読んできて頂いていることを前提とし、
- 2) 模擬査読文（甲の査読文と乙の査読文）については、その内容を確認し、
- 3) リプライ案について、木下氏に、執筆趣旨を解説してもらった上で、
- 4) リプライの適否等について、全体で議論します。

以上です。どうぞよろしくお願ひします。なお、④は、当日会場に参加者必要分を持参しますが、①、②、③は原則として、持参しません。ご自宅あるいは研究室で印刷して、ご持参ください。

\*\*\*\*\*

【書誌事項】

木下衆・樫田美雄 2012 「WEBを利用した模擬査読の課題と可能性」 in 『徳島大学総合科学部社会科学研究』26号15頁~ 28頁 ,  
<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/bulletin/socj.html>  
にて公開中 . 2013年1月24日確認